

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	藤代健太郎教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Kentaro Fujishiro
作成者（著者）	佐藤, 二美
公開者	東邦大学医学会
発行日	2018.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 65(1). p.5 5.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2018 001
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD20483786

藤代健太郎教授送別の辞

佐藤 二美

東邦大学医学部医学教育センター教授

藤代教授は、1977年東京慈恵会医科大学をご卒業後、同大学にて研鑽を積まれた後、1998年に東邦大学医学部臨床生理機能学研究室に助教授として赴任され、2004年に教育開発室教授に就任されました。

その間、研究面においては、慈恵医大で超音波定量的血流量計測装置 (Quantitative blood Flow Measurement system: QFM) の開発に携わり、血流量や頸動脈硬化の加齢変化を明らかにしました。本学では臨床生理機能検査部の長谷川元治教授 (故人)、大山俊郎教授 (故人)、白井厚治名誉教授 (前佐倉病院長) と共に大動脈脈波速度計測やCAVI (Cardio Ankle Vascular Index) の開発とそれを用いた研究を行ってこられました。日本脳神経超音波学会の設立時からの会員で、理事、機関誌編集室長を務められ、2016年には第35回日本脳神経超音波学会総会の大会長を務められました。

臨床においては、循環器の外来を担当なさるとともに、2003年から3年間、さらに2006年から3年間、大森病院院長補佐として、また院内サービス向上委員会委員長として、大森病院3号館開設に合わせて病院コンサルジュの企画・運営に携われ、職員の一体感を高めるのにご尽力されました。ほぼ同時に大森病院のボランティア活動を立ち上げられ、病院全体に新鮮さと社会の風をもたらされました。

教育開発室に異動なされてからは、様々な修学支援に携わってこられました。大学1号館6階のSDLセンター開設にあたり、各部屋と管理室の双方向連絡可能な設備を構築されました。3、4年次テュートリアルに関しては、2005年の準備から2006年のテュートリアル開始に伴い、テュータの確保とテュータの質担保のためのテュータ養成ワークショップでの指導を主体的に行ってこられました。さらに学生評価に新たにTBL方式やRubric評価など積極的な導

入を試みられ、2017年度の4年生最後の心身医学のテュータミーティングにて、テュータから学生の症例要約を聴いていると5年生の臨床実習に向けて十分な準備が出来ていると感じたとの報告もあり、先生のご尽力によりテュートリアルが熟成の域に達したことを実感させられました。また学生の臨床推論能力の向上を目指して、4年次の症候・病態学演習や5年次の臨床実習にDxR clinicianを用いた演習を導入されました。5年次でDxR clinicianに記載されたアセスメントが不足していることにお気付になったことが、3、4年次テュートリアルの症例要約の書き方の改善やRubric評価の提案につながりました。

藤代先生は学外においては2005年から共用試験実施評価機構の実施小委員会、プール化委員会、事後評価委員会などを務められ、特に症候EMI部会においては部長として第5ブロック (多選択肢択一) 設問のブラッシュアップと管理を行われました。その経験を生かして学内で作問された共用試験問題を始めとする様々な試験問題のブラッシュアップに尽力されました。岐阜大学、東京大学などが主催する様々な教育関係セミナーに積極的に参加し、それらを東邦大学の医学教育に還元するべく、問題作成WSでの講演、TOHO-WSでのタスクフォースを通じて、教員へ医学教育に関する豊富な知識を伝授し、その重要性について広めてこられました。

教育関係の業務は、縁の下の力持ち的な作業が多く、表面上、目立たない内容でも非常に重要なことが多くあります。藤代先生はそのお人柄から非常に謙虚な姿勢で数多くのことに取り組まれ、華々しさはないかもしれませんが、地道に成果を上げてこられました。藤代先生のこれまでの本学の医学教育レベルの維持・向上に対するご貢献に感謝申し上げ、今後の先生の益々のご活躍を祈念いたしまして、送別の辞とさせていただきます。ありがとうございました。